

「食えなくなったら四川の趙紫陽のところへ行け」
 二、三年前、中国ではこういうわれたという。その
 趙紫陽氏が、中国の新しい首相となった。
 そういえば、いまベストセラーの司馬遼太郎さん
 の「項羽と劉邦」でも、劉邦軍勝利の最大要因とし
 て、食糧の確保が挙げられている。趙氏もまた劉邦
 に似るか。

食わせることに天才の趙氏

中国では古来、「食は広州にあり」という。うまいものを食

わなければならない。いなければ広州に行け、というわけである。



中国新首相の趙紫陽氏（左は華国鋒氏）

しかし、こんなことがいえるのは、食うことにいささかの不安もない美食家であって、この国の大方の国民にとっては、まず食えるかどうかが先決であった。すなわち「蜀を制すものは中国を制す」よりは、食を制するものが国を制したのである。その典型的な例を、いまから二千年も前の秦末の動乱期に求めて、鮮やかに描いたのが、司馬さんの「項羽と劉邦」である。始皇帝亡き後の中原の覇者を目指して、項羽と劉邦の両者が相まみえる。軍事的には項羽軍が圧倒的に強かった。しかし、敗れても敗れても劉邦軍はそのつど立ち直った。そしてついに、「垓下の戦」で勝利をもたした。勝敗のキメ手は何だったか。食である。項羽軍は食糧の補給に無策だった。ために食を求めて離脱する兵が多かった。これに反し、劉邦軍ときたら、食糧庫を陣地にしたエピソードからもうかがえるほど、食の確保には十分気を配っていたからである。

「項羽と劉邦」のあとがきで司馬さんはこう書いている。
 「中国の政治は、ひとびとに食わせるということが第一義になっている。逆にいえば、食わせるという能力を喪失した王朝については、天が命を革（あらた）めてしまふ。他の食わせる者に対してあらたな命をくだすのである」

趙紫陽氏もまた、食わせることにかけては天才らしい。
 文革で失脚後、七五年末、趙氏は四川省の第一書記となった。

「蜀大日に吹ゆ」の三国史時代の蜀の国である。古来穀倉である。

だが、趙氏が赴任した当時の四川の穀倉地帯は荒れに荒れていた。大干ばつもあったが、「四人組」一派が作り出した無政府状態が響いたのである。

趙氏はここで何をやったか。まず農民を説得し、三毛作をやめさせて二毛作にさせた。

「三掛ける三は九だが二掛ける五は十だ」つまり、一回

の収穫量を増やせばいいじゃないかというわけだ。

ついで、文革中は「資本主義のしっぽ」といわれた農民の自留地（自家菜園）を復活した。

二毛作で暇のできた農民は、自家菜園づくりに精を出した。あるいは手内職に励んだ。これらの生産物は自由市場に出された。現金が入るから、いよいよ農業に身が入る。

かくて四川の農業はよみがえり、「食えなくなったら趙紫陽の四川に行け」という評判が立ったのである。

もつとも、多少意地悪な見方もある。

「華国鋒氏もそうだったが、趙氏も外国では、一般にはほとんど知られていません。いや中国国内でもそうなんです。とくに趙氏の場合、南では知られているが、東北部では無名に近い。そこで、当局としては、趙氏とはどういう人物か、国内外にPRしなきゃならない。

だから、「食えなくなったら四川の趙紫陽のところへ行け」というのも、うまいPRのよう

です。
 こんな意地悪い見方をするのもわけがあるんですよ。今回辞任した華国鋒首相と陳永貴副首相も、デビューしたときは、有能な農村指導者という触れ込み

趙紫陽新首相

いま人気の劉邦的性格

でした。

なかでも陳副首相は「農業は大衆に学べ」の英雄として大々的に売り出されました。ところがどうです。あれは水増しのインチキだったというんでしょ。趙氏の「食わせる」話にも、同じような心配がないわけじゃありません」（読売新聞外報部・戸張東夫記者）

しかし、人口九億、面積、日本約二十七倍の中国のことである。省単位の有名人でも、全国的にみればローカルな知名人という存在に過ぎないだろう。だが、ローカルの有名人だが、全国的には無名ということでは劉邦もまた同じだった。劉邦も沛という農村のチンピラヤクザの親分としては知られていたが、中原に駒を進めていった

むしろ「鈴木善幸型」の一面も

果たして趙氏は、劉邦たり得るか。

日本人として一九五〇年代、戦後すぐの中国の土地改革に当たった秋山良照氏が、その体験をまとめた「中国土地改革体験記」（中公新書）にも、当時広東省の土地改革事業の責任者だった趙紫陽氏が顔を見せている。

ここでの趙氏は、「農民と衣食住をともにし、農民を深く動員し、土地改革を成功に導いた指導者、そして農民については実によく知っている人」として描かれている。

段階では、「どこの馬の骨か」という評価しかなかったからである。

現在の中国が「乱の時代」というわけではないが、難しい状況にあることは確かだろう。

「あの国では乱を収めるのはインテリじゃダメなんです。劉邦タイプの農民がいい」（中国文学の藤堂明保さん）という見方もある。

果たして趙氏は、劉邦たり得るか。司馬さんの描いた劉邦は「巨大な無能者」だった。しかし、有能な士を配下に治め得たのは、この巨大な無能さ・空虚さ―そして一種の誠実さにまでつながった人柄ゆえだった。

親分がまったたくダメだから自分が才を発揮する余地がふんだんにあった、というわけである。趙氏もまた、「自らの足らざるところ」については敏感らしい。

「趙氏の大きな弱点は、外交と軍事といわれていますが、その弱点を補うため、黄華外相と張愛萍副総参謀長の二人を副首相に昇格させています。ウイークポイントを熟知しているんですよ。」

なにしろ、黄華外相のごときは、五四年に周恩来首相とともにジュネーブ会議に参加して以来、三十年近く外交畑専門に歩いているベテラン外交官ですから（前出・戸張記者）

しかし、酷評がないわけでは

ない。さる中国通がいう。

「趙氏の抜擢は、華国鋒氏が出てきたときと類似している。華氏は、湖南の故毛沢東主席のバックアップで浮上した。趙氏はといえば、四川の鄧小平氏の後押しで首相になった。実力のほどについては疑問がある。」

むしろ劉邦より日本の鈴木善幸首相に似ている。鈴木首相は『角筋』といわれているでしょ、角サンが首相になれないから、思いのままになる善幸さんを据えた。

鄧小平氏も、自分が首相になりたいたいが、どうしてもなりにくい状況だ。で、華氏を追い出し、自分の意のままになる趙氏を抜擢した。まあ『鄧筋』ですな。

もう一つ善幸さんそっくりなのは、あの人は首相になる前、国政についてしゃべったことがない。魚のことだけでしょ、趙氏もそうなんです。国政については何もいったことがありません。

の中島嶺雄さんは、こういう。

「趙紫陽は、文革のころ広東王といわれた陶鑄の下で、のし上がってきた人物で、われわれ専門家にはよく知られた人物です。『鄧筋』という評もありますが、鄧小平が二度目の批判をされたときに、四川省で鄧小平批判の演説をぶっています。必ずしも本籍『鄧小平派』というわけでもないんです。」

たしかに四つの近代化などでは、鄧路線の先を行くから、現政策を打ち出しているから、住所は『鄧小平派』ですが…。

まあ、鄧小平、華国鋒らの意見の対立のなかで、妥協的人物として登場したといえるんじゃないでしょうか。だから趙氏が首相になれたのも、時流です。趙氏も『風派』の一人だという見方もあります。」

とすれば、劉邦に似るなどというスケールの大きい話ではなくて、いまや中国も日本も、単に時流に乗った人が指導者となる時代ということが似ているに過ぎないか…。